廣东外語外貿大學

GuangDong University Of Foreign Studies

2019年度中日比较文学国际研讨会

暨广东外语外贸大学日语语言文化学院研究生学术论坛

会议手册

主办单位：广东外语外贸大学、中国社会科学院、国立大学法人大阪大学

承办单位：中国社会科学院日本研究所

大阪大学国际教育交流中心

中国日语教学研究会华南分会

广东外语外贸大学东方学研究中心

广东外语外贸大学日语语言文化学院

指导单位：教育部高等学校外国语言文学类专业教学指导委员会日语分委会

中国日语教学研究会

特定非营利活动法人源氏物语电子资料馆

广东省本科高校外语类专业教学指导委员会亚非语言专业分委员会

协办刊物：伊藤科研《海外平安文学情报》

《日本学刊》

《汉学研究》

《广东外语外贸大学学报》

《东亚文化研究》

《日本文论》

中国·广州

2019年12月20日~22日

具体日程（一）

12 月 21 日 开幕式、大会基调演讲、大会主题发言

时间·地点	会议日程	主持人
开幕式		
9:00-9:30 国际会议厅	一、9:00 介绍领导、专家、嘉宾 二、9:05 广东外语外贸大学隋广军书记致欢迎词 三、9:15 中国社会科学院杨伯江教授致辞 四、9:20 大阪大学代表伊藤铁也教授致辞 五、9:25 教育部高等学校外国语言文学类专业教学指导委员会日语分委会修刚主任致辞 六、9:30 中国日语教学研究会会长周异夫教授致辞	陈多友
9:35-10:00	会议合影、茶歇	
大会基调演讲		
10：00-11:10 国际会议厅	演讲人：修刚（天津外国语大学） 题目：跨文化交际视阈下的中日交流	杨晓辉
	演讲人：杨伯江（中国社会科学院日本研究所） 题目：关于区域国别研究的一点思考	
11：10-12:20 国际会议厅	演讲人：周异夫（吉林大学） 题目：明治“国家”的文坛	张秀强
	演讲人：伊藤铁也（大阪大学） 题目：世界中で読み継がれる〈平安文学〉	
12:20-13:20	午休、午餐	
大会主题发言		
13:30-14:30	邱鸣（北京第二外国语学院） 题目：中日军记小说应验描写的异同及其文学理念	王婉莹
	宋协毅（大连大学） 题目：通訳人材の育成の諸問題とその対策について	
14:30-15:30	林岚（东北师范大学） 题目：『大和物語』百五十六段について	林敏洁
	周阅（北京语言大学） 题目：从《马美人》看川端康成对唐传奇的吸收与借鉴	
15:30-16:30	林璋（福建师范大学） 题目：翻译的策略与实施方法	马永平
	刘雨珍（南开大学） 题目：张斯桂《使东采风集》中的明治日本	
16:30-17:30	张楠（南京理工大学） 题目：日本古典文学中之“镜”意象与道家文化	李雁南
	佟君（中山大学） 题目：关于日本国名（日本の国名について）	
18:00-19:30	晚餐	

12 月 22 日上午　专家分科会

第一专家分科会（8:30-10:30）			
主题：日本古典文学　发表人数：6　地点：7 教 607　主持人：伊藤鉄也 汪平 李东军			
8:30-8:45	小川陽子	岐阜大学	中古に受容された『源氏物語』
8:45-9:00	須藤圭	筑紫女学園大学	中世に受容された『源氏物語』
9:00-9:15	レベッカ・クレメンツ(代読)	バルセロナ自治大学	近世の俗語訳『源氏物語』
9:15-9:25	休息		
9:25-9:40	庄婕淳	惠州学院	林文月訳『源氏物語』
9:40-9:55	吕天雯	南京工业大学	《源氏物语》中读书活动小考
9:55-10:10	郑寅珑	中山大学	《源氏物语》对中国史传文学的接受研究——以“白虹贯日，太子畏之”为例
10:10-10:30	参会者交流讨论		

第二专家分科会（8:30-10:30）			
主题：文学文化　发表人数：6　地点：7 教 316　主持人：陈访泽　冈田昭人			
8:30-8:45	陈访泽	澳门大学	明清四大名著在日本的传播与再创作倾向
8:45-9:00	胡照汀	华南师范大学	论《元亨释书》僧传的叙事特征
9:00-9:15	李东军	苏州大学	浓丽细婉：藤原定家“浓体”和歌的美学释义
9:15-9:25	休息		
9:25-9:40	罗石巧	西南科技大学	中日蚕丝文化的比较研究
9:40-9:55	梁奕华	东京外国语大学	島田忠臣の「分」意識 —白居易の「分」意識との対照——
9:55-10:10	常思佳	东北师范大学	川端康成の翻訳と創作 —唐代伝奇小説を中心に
10:10-10:30	参会者交流讨论		

第三专家分科会（8:30-10:30）			
主题：文学文化　发表人数：5　地点：7 教 317　主持人：吴光辉 刘克华			
8:30-8:50	胡文海	浙江大学	俳谐音韵考—以芭蕉“朝夜さを誰がまつしまぞ片心”为例—
8:50-9:10	王佳璐	长春工业大学	日本汉文小说《太平记演义》研究—从《太平记》到《太平记演义并通俗》的翻译态度考察
9:10-9:30	任清梅	青岛大学	石川雅望読本における『笠翁十種曲』の利用法について
9:30-9:40	休息		
9:40-10:00	李雁南	华南师范大学	从“无产阶级作家”到“从军作家”:里村欣三“中国体验”文学中的身份转变
10:00-10:20	陶凤	内江师范学院	太宰治的女性独白体叙事研究
10:20-10:30	参会者交流讨论		

专家发表内容摘要

中世に受容された『源氏物語』

岐阜大学　小川陽子

〈中世〉という時代区分をどこに設けるかは、日本・中国・西洋など、取り上げる対象によってそれぞれに異なる。さらに日本史においても、どの時点を中世の始まりと捉えるかは、見解が分かれている。では、文学史、とりわけ『源氏物語』受容史の場合はいかがであろうか。

『源氏物語』にとっての〈中世〉の始まりは、この物語を原文だけでは読めなくなった時点、すなわち、解説が作られるようになった時点、と捉えて良いだろう。作品の成立から一定の時間が過ぎ、言葉や文化、社会が変化すると、作品と読者との間に距離が生まれ、その作品を味わうための解説や情報が求められるようになる。作品と読者の新しい関係の始まりである。『源氏物語』の場合、それは院政期のことであったと考えられている。現代語訳や多言語翻訳は、『源氏物語』を他の言葉に置き換えながら味わう、すなわち、他の言葉で解説を加えながら味わうという受容のあり方であるが、これらの起源は中世にあると言える。

本発表では、中世において、『源氏物語』の解説がどのように行われていたか、またその解説が『源氏物語』の読みや新しい作品・文化の生成とどのように関わっていたか、具体的な例を確認していく。中世における『源氏物語』の解説には、注釈、系図、梗概書（あらすじ）など、さまざまな内容、形態のものがある。また、『源氏物語』の影響を受けて生み出された文学作品や文化は、和歌、連歌、物語、謡曲、絵画など、多様なジャンルに及んでいる。そして、それら中世に生み出された作品の中には、『源氏物語』の原文だけでなく、解説類に示された解釈の影響を受けたと考えられるものも複数ある。『源氏物語』の研究と新たな作品の生成が関わり合っていたということである。このような中世における『源氏物語』受容の具体的なあり方を確認することを通して、中国語をはじめとする多言語に翻訳しながら『源氏物語』を味わうという現代そして今後の『源氏物語』受容についても考えてみたい。

参考文献

伊井春樹『源氏物語注釈書・享受史事典』（2001 年、東京堂出版）
辛島正雄『中世王朝物語史論　下巻』（2001 年、笠間書院）
小川陽子『『源氏物語』享受史の研究』（2009 年、笠間書院）
鈴木健一『古典注釈入門　歴史と技法』（2014 年、岩波書店）
「中世王朝物語全集」（1995 年～、笠間書院）

中古に受容された『源氏物語』

筑紫女学園大学　　須藤　圭

平安京遷都から鎌倉幕府開設あたりまでのおよそ四〇〇年、平安京に生きた貴族たちが政治・文化をリードした時代のことを〈中古〉と呼ぶ。この〈中古〉の時代に成立した『源氏物語』は、現代に至るまで、あまたの文物に大きな影響を与え続けてきた。そしてまた、当然のことながら、この物語は、『更級日記』からうかがい知ることができる菅原孝標女の物語世界への憧憬のように、成立して間もない〈中古〉の時代においても、非常に多くの読者を獲得していたらしく、だからこそ、同時期の文学の生成にも少なくはない影響を及ぼしていたといってよい。

『源氏物語』の影響は、たとえば、ことばの表現にかかわるものとして、また、物語の構成にかかわるものとして、ないしは、作者の深層に作用するものとして、様々なかたちで表出する。具体的に述べておけば、『源氏物語』橋姫巻と『夜の寝覚』巻一に描かれた女たちの合奏を男がかいま見る場面、『源氏物語』若菜上巻と『狭衣物語』巻三に描かれた猫が原因となった男女の邂逅のくだり、あるいは、『源氏物語』五十四帖の個々に付された巻名と『栄花物語』四十巻の個々に付された巻名など、それぞれに『源氏物語』からの影響を指摘することができる。

本発表では、『源氏物語』からの影響を色濃くのこす、これらの物語や和歌をとりあげ、どのように『源氏物語』を摂取し、どのように『源氏物語』を乗り越えようとしてきたかを具体的に検討しながら、この物語の文学史上の位置づけを考えつつ、〈中古〉の時代における価値をさぐっていく。さらには、『源氏物語』を受容し、影響を受けた物語や和歌――『浜松中納言物語』や『夜の寝覚』『狭衣物語』『とりかへばや』を、中国語をはじめとする多言語に翻訳しようとしたとき、どのように向きあうことができるか。網の目のような複雑な影響関係にある〈中古〉の文学を、多言語翻訳の中で読み解いていくことの可能性についても考えてみたい。

参考文献

岡一男『源氏物語事典』（春秋社、1964年）
重松信弘『源氏物語研究史』（増補新攷、風間書房、1980年）
寺本直彦『源氏物語受容史論考　正・続』（風間書房、1970年・1984年）
宮下雅恵『夜の寝覚論　〈奉仕〉する源氏物語』（青簡社、2011年）
鈴木泰恵『狭衣物語／批評』（翰林書房、2007年）

彼等自身の言葉で
—江戸及び明治初期の『源氏物語』の訳者たち—

カタロニア高度研究施設兼バルセロナ自治大学
レベッカ・クレメンツ

本発表では江戸時代と明治初期における『源氏物語』の俗語訳者の「翻訳意識」を探るために、彼ら自身の、「訳」をイメージして用いられた用語や比喩などを考察したい。なぜ前近代の「翻訳」者の用語を調べるべきかという前提を確認したうえで、17 世紀後半から明治初期にかけての「俗語訳」に対する態度の変化を辿りたい。

I　なぜ前近代の「翻訳」者の用語を調べるべきか

現在の翻訳研究(TranslationStudies)という分野では、従来のヨーロッパ中心主義を批判し、西洋の翻訳史以外の翻訳文化を研究すべきだという声が挙げられてきた。それに答えるには『源氏物語』の翻訳史には豊富な資料があるということは言うまでも無いが、今日は特に俗語訳に対して使われてきた用語について考えたい。

II 江戸時代・明治初期における古典の俗語訳(抄訳を含む)

源氏概要書の『おさな源氏』などはこれらの「俗語訳」と類似しているが、その方法と、方法を説明する表現に若干の違いが見られる。

III 移す・写す・映すとしての俗語訳

江戸時代と明治初期における外国語のオランダ語からの翻訳と異なって平安時代の和文から俗語に訳することを「うつす」という訳者が多い。

IV 学者の俗語訳意識の転機——本居宣長の『古今集遠鏡』——

1723 年に源氏の原文を勉強したい人のために『紫文蜑の囀』が出版された。学者の俗語訳に対する態度は本居宣長の『古今集遠鏡』(1797 年)まで続いたようである。

V 明治初期の訳『似而非源氏』と西洋書の「翻訳」

明治期に最初に出版された『源氏物語』の俗語訳は 1892 年の『似而非源氏』である。(国)学者による訳ではあるが、俗語に対する不安が見られず、「翻訳」あるいは「訳」というプロセス自体に関する不満が表れる。これは日本古典文学としてカノン化されつつある『源氏物語』に、現代の聖典的翻訳概念が初めて採用されたもの、あるいはそれに近いものと言ってよかろう。

《源氏物语》中读书活动小考

南京工业大学 吕天雯

摘 要：《源氏物语》作为细致描写平安时代贵族生活的一部鸿篇巨制，作者紫式部深厚的文学功底令人赞叹不已，作为世界上最早的长篇小说其研究意义也不言而喻。目前已有众多学者从紫式部的人生经历、《源氏物语》对中国文学的接受、女性观、和歌文学、佛教信仰等不同角度对《源氏物语》进行了考察研究。

本篇着眼于《源氏物语》中对源氏的教育观念及不同人物读书学习活动的描述，梳理出物语世界中男女主人公的学习内容，并结合现存的平安时代的史料加以分析，探讨当时贵族男女深厚的文学修养的根基。

平安时代日本吸收了大量中国文化，对中国文学及文化的学习成为贵族男子的必修课。源氏在七岁时开始读书，这正是当时贵族男子普遍开始学习的年龄。从对他行为的描述可知，他要学习“规定的种种学问”，另外还要学习琴和笛等才艺。成年后的源氏坚持“以学问为本，再具备大和智慧而见用于世”的教育理念，让儿子夕雾进入大学寮研习汉学。

另一方面，从藤式部丞对妻子的描述、紫姬及玉鬘的读书活动来看，当时社会男子对女子读“三史五经”的行为表示不屑，在“女子特别专精一种学问是不相宜的。但倘对一切文艺一概不懂，也是不好的”这种教育观念的影响下，贵族女性在学习乐器、书法、绘画等文艺的同时，还要涉猎中日古典文学中的常识性知识，并广泛阅读《住吉物语》等古代物语故事。她们能够通过阅读古代小说故事思考女性的命运及自己的人生际遇。

《源氏物语》对中国古代诗歌及日本和歌的旁征博引体现了作者紫式部的文学修养之深厚，也在一定程度上反映了上层贵族女子的文学修养之高。此外，文中还阐述了源氏对诗歌语言、物语故事的理解，可以说是作者紫式部的文学评论主张。

通过对《源氏物语》中的教育理念及读书活动的梳理，可以发现紫式部在“和魂汉才”的教育理念下编织的贵族教育体系。这既是对当时贵族子女读书学习情况的写照，同时也是对掌握实权的贵族通过荫位制获得高官位的现实情况的反讽。

参考文献

武原弘「源氏物語のなかの教育論：夕霧論序説」『国語教育研究』26 上号、1980. 11。

佐伯雅子「『源氏物語』における学問・学識—「才」についての考察」『人間総合科学会誌』1 巻 1 号、2005。

酒井貴大「『源氏物語』における光源氏の教育観：「教ふ」を手がかりとして」『愛知大学国文学』53 号、2014。

尾田綾子「『源氏物語』の教育学的考察その二：玉鬘十帖における王朝の女性教育」『千葉敬愛短期大学紀要』14、1992。

蔡荷，王翔著《香艳面纱下的“真我”——解读千年<源氏物语>》，北京：九州出版社，2014. 5，p184-192

《源氏物语》对中国史传文学的接受研究

——以“长虹贯日，太子畏之”为例

中山大学外国语学院　郑寅珑

中国史传文学源远流长，可上溯至先秦时代的《尚书》、《左传》等经典，至两汉达到高峰，尤以《史记》、《汉书》为代表。这类著作自公元六世纪左右传入日本后，对日本文学创作产生深远影响，尤以《源氏物语》为代表。

在《源氏物语》贤木卷中，当时掌权者右大臣的孙子头弁对政敌光源氏吟咏了“白虹贯日，太子畏之”一句。“白虹贯日，太子畏之”见于《史》、《汉》等书，出自邹阳在狱中上书梁孝王之文，痛陈忠臣不被信任之哀。针对此句，《源氏物语》注释书已经有所关注：一方面注明原出处，如《奥入》首先指出此句出自《汉书》；《紫明抄》继承前说，并列出《汉书》中对“白虹贯日”的注释；而《细流抄》则提出《史记》、《文选》亦有作为出处的可能性。另一方面解释此句引用之意涵，如《河海抄》首次谈及此段汉文引用在物语中所起的文学作用，言头弁以燕太子丹暗喻光源氏心怀不轨；《花鸟余情》则认为头弁以荆轲喻光源氏、燕太子丹喻当今太子（冷泉帝），意在讽刺光源氏图谋必败；《岷江入楚》联系《汉书》注释中 “白虹主内淫”之说，指出此引用或与胧月夜私通光源氏一事有关。

针对古注释中众多说法，日本学界展开了广泛讨论，通过考察玉上琢弥（1964）、山崎诚（1973）、中川宽（1980）、日向福（1991）、小岛菜温子（1995）、神尾登喜子（1997）、佐藤信一（2000）等诸多重要学者的研究，总结发现争论点主要集中在四个方面：第一，头弁将当时天皇比作为暴君秦始皇的原因；第二，“太子畏之”的“畏”应作何解；第三，荆轲、燕太子丹、秦始皇与《源氏物语》中的人物对应关系；第四，“白虹贯日”这一现象所蕴含的意义（即在《源氏物语》中的涵义）。

其中，日向福综合考察贤木卷中其他两处《史记》引用，提出此处亦应引自《史记》；头弁学识浅薄，故以荆轲刺秦王之典故讽刺光源氏；而光源氏没有反驳，是因为他忧虑与胧月夜私通一事暴露而心虚。本文基于前人研究，结合《源氏物语》上下文意，并深入考察中国古书古注，认为《岷江入楚》提出的“白虹主内淫”说最具解释力。

主要参考文献

1. 玉上琢彌『源氏物語評釈』第 2 巻、角川書店、1965 年 1 月
2. 山崎誠「源氏物語の漢詩文朗誦-「白虹貫日太子畏之」と「風之力蓋寡」をめぐって-」『国語と国文学』50－9、1973 年 9 月
3. 中川寛「「白虹日を貫く」攷」『解釈』26－4、1980 年 4 月
4. 日向福「「賢木の巻」の構成について—『史記』との関連で—」『和漢比較文学』7、1991 年 6 月
5. 小嶋菜温子『源氏物語批評』、有精堂、1995 年 7 月
6. 神尾登喜子「帝位と天文密奏——宿曜と白虹貫日——」『源氏物語と古代世界』、新典社、1997 年 10 月
7. 佐藤信一「白虹日を貫けり。太子おぢたり—漢籍引用による物語の重層化」『国文学：解釈と教材の研究』45－9、2000 年 7 月 10 日